

夏の終わりに(再会、そして別れの季節)

(九月十六日、日、パリ)

ベンチの上では余り、良い眠りは得られなかったものだが、加えて、殆ど一晩中、頭の中では日間のセクサンでの楽しかった思い出が未だに、ぐるぐる廻っている様なものだった。

お互いに流暢な英語を使いこなせる訳でもないのだが、意志の伝達は十分に伝わるので不足はない。時には、一生懸命に言葉を探しながら伝えようとすると時の表情は、却って、可愛らしさが感じられる様な側面もあったただろうか。

「まだ、お互いに出逢ったばかりなのに、もう、別れの時が来るなんて…。寂しいよ」
ブジョジエットの言葉が今も脳裏には蘇り、渦を巻いてくる様でもせぬ。

今朝は、再びパリ東駅に舞い戻って来た際に知り合った長井君と共に、ほぼ、一日中をパリの市内観光とした。

連れ合いが居ると、お互いに写真を撮りあつたりするときは便利である。

ルクセンボURG公園、ノートルダム寺院、ルーブル美術館等を歩き回り、又方近くには彼とも別れた。

セーヌ川の畔では、ベンチに腰を落として暫くの休息時に、ふと思いついたことがあった。その言葉は、二年前の五月の頃に、日光東照宮の参道で声を掛けられて知り合った一人のフランス人女性の内の一人、エバの住所は、確か、この近くだったな。

それと、『フランスに来られる機会がありましたら、是非、連絡くださいね。』とのメッセージと連絡先の住所も貰っていたものだった。

直ぐ近くへの呼びなのでは、序のついででもあり、ちゅつと、顔を出してみようかな、と思いついたものだった。

住所の番地を見比べながら、少々歩き回った処で、その石造りのアパート建物には辿り着いた。

然しながら、郵便受けの表札には彼女の名前は見当たらなかった。

丁度のタイムミングで、入りの口付近で出会った五十代後半位かと思える女性に彼女の名前を出して訊いてみた。知らなかつたの応答。

考えてみる、この名前もその頃とは納得いかない様な話でも無い。

多分に、二年前の彼女達にまつてみれば、六月の卒業を前での卒業旅行だった様であり、二人で日本のあちこちを旅行しながらの最終日に日光東照宮を観光で訪れていた際、

「一緒に、良いですか？」

と、またまた、私に声を掛けてくれたことでも知り合ったものだった。

東京の代々木ユースホテルに宿泊して、翌日には、羽田からの夜の便で帰国するとの話

だった。

まだ、当時の訪日外国人旅行者数と云うのは中国や朝鮮半島、台湾を含めたアジアからでは殆ど皆無の時代であり、欧米からの旅行者と云うのも、まだまだ、少数の時代ではあった。しかも、若い女性二人だけの欧州からと云うのは、まだ珍しいくらいにケースでもあったので、周りには俄かにカメラマンが集まり、多くの写真を撮らわけては、後で送られても来たものだった。



そもそも、私が欧州旅行への関心を抱くに至った原点の二つは、この日光での彼女たちとの出逢いの影響と云うのも幾らかはあったろうか。云う気はしないものでもない。

ロ、ロ、このパリ・セーヌ川近くのアパートでのすれ違いと云うのがお互いの永遠のすれ違いと云うことにはなるので、人生上での縁と云うものは、人知の及ばない処での細い糸が繋がっているか、何処かで途切れているかと云った様なことなのかも知れない。

卒業してからの三年も経てば、それ迄のアパートからの転居と云うパターンはフランスに限らずとも普通のことではあるだろうから。

さて、パリの空気は十分に満喫した様にも思えるので、今夜の夜行では何処か、他への移動をしたいものとパリ東駅に舞い戻って来た。

時刻表の掲示板を追っていると、今夜の車中泊用としては適当そうな列車がスイス方面行きであったの、それに乗ることにした。

（ 九月十七日、月 チューリッヒ～インターラーケン ）

昨夜遅く、パリ東駅からの夜行に乗り、朝、目覚めるとチューリッヒに着いた。

ともあれ、降りて、チューリッヒの観光をした。

まずは、チューリッヒ湖の遊覧船に乗ってみる。

天気にも恵まれたので、山の雄大な景色を眺めながら船上では爽快な気分だった。

一日を周辺の散策で過ごし、夕方方の列車で、取りあえず、西方のベルンに着いた。

さて、この後の今夜の宿は何処へ向かったものかと云うのが、少しの迷いにはあった。


ガイドブックを開き見ながら、結局、近隣のインターラーケンのユースホテルに向かうことにした。

インターラーケンの駅に着いたときには二〇時を過ぎていた。

駅を出て、ガイドブックのマップを見ながら暫く歩いてみると、女性の二人連れから声が掛かっ

た。

「ユースホステルを探しているの？」

「エッ?」「おっすいっすい」

「私達も同じだからいいよ、一緒に行きましょう。貴方はどちらからなの？」

「ありがとう。僕は日本からです。貴方たちはどこから？」

「私たちがアメリカからだよ」

「渡りの船?」
「はい。ありがとうございます。ありがとう。ありがとう。ありがとう。」

「もうしばらく予定や事前の予約を取ったりしたことがあるけど、いっしょに行き当たりついたりなのよ、でも、今回も特に、宿泊の予約がある訳ではない。」

到着をええわは何とかなるだろうというのがいつものパターンではある。

この夜には、彼女らからの声掛かりのお陰もあって、ユースにもすんなりと辿り着くことが出来た。

宿泊料金は一泊朝食付きで100フランと、これ迄に利用したユースの中では一番高かった様ではあったが、こじんまりしたユースなので、営業上ではそんなに楽でもないだろうか。

宿泊客はこの二人のアメリカ人女性と、同じく二人のアメリカ人男性と一人のフランス人女性。それに、私を含めての六人だった。

部屋は二段式ベッド二組の四人定員で、二人のアメリカ人青年と私での三人相部屋だった。

「お、おしはステイブだ。会えて嬉しいよ。」

「お、サトルです。おしも嬉しいよ。君はどっから来たの？」

「アメリカ。君は?」

「そう、日本から。イギリスをヒッチハイクで一周した後には北欧を周ってから南下して、あちこち彷徨いながら、今夜、ここに辿り着いたって処だよ。」

「色んな所に行ったんだな。何処が良かったかな?」

「三日前には、フランス北部のセタンという小さな町で六人姉妹の長女との出逢いの機会があったよ。町のあちこちを案内して、夜にはバブにも誘ってくれた。家族の皆さんにも歓迎を、食事の準備も世話をしたんだよ」

「エッ... そりゃあ、凄いなあ... 羨ましいぜ... だけど、なんで?」
「どうして、そのまま、直ぐ出て来てしまったんだ?」
「おしには理解が出来ないよ。折角の機会を生かさないなんて...」



オシだつたら、そのままに居座つて、長居を決め込んでしまつてはなあ。」
「……」

なるほど……。言われてみる、何と返つて現るものか、一瞬間の戸惑いがあつた、一瞬間の戸惑いがあつたものだった。

確かに、大変貴重な機会と云うのか、大きな鯛を釣り上げて、手を伸ばし、触れた瞬間に糸から外れてしまった様なものだろうか……。

一抹の後悔の念も湧いて来たので、パリからの帰国便の前日迄には、もう一度、再訪してみようとの思いに至つた。

(九月十八日、火 チューリッヒ)

朝の八時過ぎに、下段のステューブに起きをされて、降り始める、外は朝からの雨模様だった。

天気が良ければ、シエルマット観光にでも足を延ばしてみようとの思いはあつたのだが、山の見物どころはなせつな天気だ。

何処に赴いて過ごしたものが……。

ともあれ、インターレーケンの駅前の商店ではブリジットと妹たちへの再訪へ向けての細やかな土産品を買つた。

荷物が増えたので、背中のリュックがぐらぐら重くなった。

また、売店では絵葉書も買ったので、日本の友人たちへ、そしてブリジットへも書いて出て来た。おいだ。

ブリジット宛へ

「後」の二十一日、もう一度は立ち寄りますか？」と。

シエルマット観光は諦めざるを得なかつたので、その後、今夜の夜行で、スイスのマッターホルンがバルセルナ辺りにある、向かつたものだろうかとの思いはあつた。

(九月十九日、水 パリ〜ローマ)

昨夜には、回シエルマットを出て、それから一気「スイス」……との発想ではあつたのだが、結局のところ、睡眠時間に充てる便の時間都合で、またしてもパリへと舞い戻つてしまったものだった。

そもそも、予定というのは全くないのだから、ロタ、時刻表の次第で行き先も決まると云つた様なものである。

パリへ舞い戻つて来たからには、さきほど今日の一日はパリ市内の観光と云つておいた。取敢えずは、背中の重い荷物をロッカーに預けてから、ハミリカメラを手にして街に出る。

リヨン駅からセーヌ川沿いへと歩いて、ノートルダム寺院、カルチエラタン、ルクセンボーグ公園などをフィルムに収めながら歩いて周る。

その後にはエッフェル塔に向かい、第二展望台まで上がって市街を見下ろしての気分は格別であった。

続いては、凱旋門から、さらにはシャンゼリゼ通りを歩いてから地下鉄でリヨン駅までを引き返した。

その後は、少々無理をしても、過日のナポリまで出向いて、郵便局窓口の人にカメラを売り払って来ようか、それとも、タイムリミットを過ぎると、無理をせずに、早めにコースにも落ち着いて、翌日午後の便でセタンへ向かうのが無難だろうかの迷いがあった。

折角、売って行くかと懇願をされてはいるのだが、やはり、これは、売ってお金にした方がいい、時間的な計算では大丈夫だろうかの不安と迷いである。

なかなか、決めかねては居たのだが、つい、発射時刻が迫っていたので、思わず、ナポリの列車に飛び乗ってしまったものだった。

乗車はしたものの、列車が動き出すまでの間、そして、動き出してからも、果たして、ナポリには行ったものかというかは逡巡していたものだった。

ブリジットには、先のインターレーケンから出した絵葉書の中で、次回のセタン駅への到着予定日時を二十一日の午前十時と書いて知らせておいたものだった。

列車が走り出してからもうソワソワして落ちて着かない。窓外の景色なども眺めている余裕などはないのだ。

移動中にもずっと、ナポリ迄の往復時間の計算をしながら、オロオロしてはいたのだが、結局の処、ソワソワも、間合も、ソワソワの判断に至ったので、途中ではナポリ行を諦めて、ローマ駅に降りた方がいいと思った。

（ 九月二十日、ローマ ）

お昼過ぎ頃には、ローマ駅に再到着。ナポリ行を断念したので、ハイハイ下車して、折り返しの便までには四時間程度の時間しかないのだが、取敢えずは来てしまったので、面替をして、荷物ロッカーに預けて街に出てみることにした。

ローマから、好んで一週間前にフィレンツェから乗車した同じ便に乗車すれば、予定時刻の翌朝十時にはセタンに到着するのだという計算である。

サンタ・マリア・マッジョーレ教会やテオクレティアヌスの浴場跡等とその周辺を少々歩き周ってから駅に舞い戻って来た。

何しろ、フロッジビエッタへの明日のセタン駅への到着予定時刻については、インターレーンからの
絵葉書に書いて出ておいただけのことであり、それが確実に届いていて、既に「解事項である
かどつか」について確認のしようが無いので、果たして大丈夫だろうかとの多少なりの心配事項
ではめ。

夕刻五時半頃のフランス方面行き列車に乗車した。

（九月二十一日、金　セタンへの難行）

さて、朝を迎えてから、そろそろ午前十時近くになって来ていたので、もう暫くの内にはセタン
の駅に無事に到着だろうか、窓外の様子を眺めていたのだが、どうも、様子が変だった。

停車駅の表示と地図との確認をしていた処、どうやら、列車は既に、ルクセンブルクを過ぎて、
ベルギー内へと入っている様子だった。

（何だ、これは…！ 一体、どうなってるんだ？）

つまりは、ローマから乗車した便は確かに、一週間前にフィレンツェから乗車した時の同時刻
の便だった筈なのだが、途中、フランス北部のティオンヴィルでは車両が二手に分かれての走行に
なっていた様だった。

新宿からの小田急線では、相模大野で江の島方面行と小田原方面行とに車両が分かれる便
が有るのだから、そう云うことだったのか…。

そんなフロッジビエッタはセタンの駅に迎えに来てくれるかも知れないの…。
大変なことになるかもしれない。

仕方がないので、次の駅では下車して、取りあえず、ルクセンブルクまでは引き返したものの、
セタン方面への便と云うのが十七時以降の夕方まではなさった。

次第に、冷や汗が出る様な焦りばかりではあるが、取りあえずは、車両が二手に分かれたティ
オンヴィルまでを引き返してみた。

然しながら、泣きつ面「騒」は良へ云ったもので、不運な時は必ず「騒」のことと重なるとの
だと思つた。

セタン方面への列車の便が無かったというか、駅窓口で問い合わせたところ、先の国際列車は
動いていったものの、

「セタンはフランス国鉄がストライキ中なので国営便は、今は動いてないのです」との説明だっ
た。

「えええええ…！ そんな…。大事な約束があるのに云うの…！」
何と云う、偶然にも、運の悪かかろが、いつも車なるものだから、心中穏なびびる事
態なめあつたが、如何にもしてがた。

「何時頃には動へてくれるか？」
「おめえなれ。今の段階ではまだ、判らな状況では」

「👀👀👀👀」

何時に帰るには動くのかと訊いても、うちが明かない様な話ではあったが、漸くの回答では「十九時半頃には動くかと思えます」との回答があった。

「これは遅くなり過ぎないか。」「もうなったら、最後の手段でのピッチハイフだろうか、駅外に出て暫くはトラライとしてみたものの、余りの反応の悪さに断念して引き返す。」

そもそも、駅前みたいなところからではタクシーじゃあるまいし、捨てる訳もないのだから、イギリスとは違って、英語では話が滅多には通じないのだから余計に無理も有るんじゃないだろうか。再び、窓口を引き返しては色々と問い合わせをしたのだが、

「十六時二分のTTEEを利用してルクセンブルクに出れば、そこからは十七時半のセタン方面への便が有りますよ」
との話だった。

では、それでいい。否、そうは思ったのだが、TTEEの料金表を確認すると、想定外の料金であったので、ちもむなしく諦めることになった。🙄

結局の所、セタンまでは、あと一歩という所までは近づきながらも、それ以上には進めそうにないので、取りあえずは、ブリジッタ宛に電報を打つ。「斯く斯くしかじかで、前に進めない状況なので、また、後で連絡しますよ」。

殆ど一日中を右往左往しながらの立ち往生となっていました。漸く、また、窓口での説明を得る機会が出来た。

「十八時十五分のバスでアヤンジュへ出れば、そこから十九時二十九分発のセタン方面行列車があります。それに乗れば、セタンの駅には二十時五十四分の到着予定になります」
との説明であった。

仕方がないので、ブリジッタにはフィオンザイルの郵便局からの電報で緊急連絡を入れる。

「到着予定時刻が二十時五十四分になりました」と。

列車は、定刻に少々遅れて、セタン駅への到着は二十一時一〇分であった。

この程度の到着時刻の遅れと云うのは、日本以外の国では良くあることなのだろう。

改札を出ると、ブリジッタとお父さんと妹(次女)のグループの三人が迎えに来てくれた。インターレーケンからの葉書では、到着予定時刻を午前十時と連絡してあったので、午前にも来てくれていたのだから、本当に大変な迷惑を掛けたにも関わらず、一片の不機嫌さも無く、にこやかに歓迎のハグで迎えてくれた。何と云ったら良いのか……。ウッと来るような感動があった。

駅からはタクシーに乗り、約十分か十数分だったろうか、家に到着すると、もう、大分、遅い時間にも拘らず、お母さんや妹たち、皆さんににこやかに歓迎して迎えてくださった。

直ぐに、荷を下ろして、家族全員の一一人一人とも軽いハグの挨拶を交わした後、リュックの紐

を解き、インターレーケンで買っておいた細やかなお土産品をテーブルの上に並べ置いた。

それと同時に四人の妹たちは「フッー」と一斉に先を争って手を出し、取り合った。

一番下の妹アレンは、まだ二歳なので、付いては行けないのと、ブリジットは大人の雰囲気なので、口、笑顔で眺めているだけなのだが、善が転んでも笑いが出る様な世代の四人の女の子なので、キャッキヤッと大変な盛り上がりとなげかきである。国は変われど同じ様なものだろう。

率直な所、これ程に明るくて、賑やかで、楽しい家庭と云うのは、これ迄の人生上でも見掛けただけが無い程の盛り上がり様であった。

「オ、ン、ン、ン、ン、ン！ ジャスト・ア・モーメント、ジャスト・ア・モーメント・プリーズ。今から、日本のジャンケンと云うゲームを教えるよ。それで、勝った人から順番に好きなのを選んで取るんだよ。いいかな？」

「〇×△×□×〇……………」

「いいかい？ これはグー。これはパー。これはチョキって言うんだよ。グーとチョキではグーの方が強い。だけども、グーとパーではパーの方が強い。そして、パーとチョキではチョキの方が強いんだよ。この三種類のどれかを同時に出しての勝負になる」

「〇×△×□×〇……………」

「いいかな？ 解ったのかな？ この三種類のどれかを「つやっつ、」最初はグー、ジャンケンポン』『アイ、ロ、シヨ』『アイ、ロ、シヨ……』もう一回続けるんだよ。勝負が着くまでね。ちよっつ、一回、練習してみたいかな？」

「〇×△×□×〇……………」

ともあれ、右の講義と練習の後に本番勝負のジャンケンとなった。

「アイ、ロ、シヨ、それでは今度本番だよ。ちよっつ、つやっつ、アイ、ロ、シヨ、ジャンケン・ポン！ アイ、ロ、シヨ、アイ、ロ、シヨ……」

取りあえずは、一人か二人が勝つたような結果内容ではあったのだが、その結果には関わりなく、その直後の瞬間には四人が同時に手土産品に手を出して取り合った。

まあ、エサを前にしての初めてのジャンケンゲームでは、説明の理解も今ひとつだったのかも知れない。

十五歳のエニークには多少なりは英語が理解出来ているのかも知れないが、この九月から小学四年生の双子のジャスリンとエブリンに至るまでには私の下手な英語も殆ど通じてないのかも知れないし、私もフランス語での説明、やり取りは出来ないのな、結局の処、最後はどくどくおぼれた様に、其々の手に落ちてしまったのは致し方ない処だろう。

只一人、冷静沈着な二歳のアレンは、あつてとられている様な様子ではあったが、お父さん

とお母さん、それにブリジットはその光景を見ながらの大笑いであった。

女三人寄れば何とやら、という古い言葉が昔の日本ではあったものだが、年頃の女の子達が四人で争うともなれば、それは、それは大変な賑やかさであり、家中が大変な盛り上がり様であった。

本当に、お土産品とは言っても、私には資金力が無かったのでホンの細やかなもののだが、皆さん、大変に喜んでくれて、妹たちの全員からも頼に感謝のキスを受けたものだった。

お父さんには、私が唯一持参していた赤系のネクタイを差し上げて、お母さんには、やはりインターフーケンで買った細やかな品を差し上げた。

（九月二十二日、土 別れの時）

翌日には、朝からブリジットと二人で街中を少し歩いて、先日の湖にやって来た。

男女の二人が時間を過すには風光明媚で落ち着いた雰囲気であり、良い所だろう。

「この風景は綺麗だね」

「貴方はどういった所は好きなの？」

「うん。座って眺めていても飽きないよ」

「その時間があるくらいなら思っているよ」

「そうだね。昨日は朝の十時には着くと思っていたんだけど、まさか、列車がストライキで動いてないなんて云うのは想像もつかなかったよ。運が悪かったよ。あと一日、早めに来れば良かったなあと思っているよ」

「明日の飛行機は何時になの？」

「オurlーから、午前10時10分の便だよ」

「折角、逢えたのに、時間が短かったよね。残念だよ」

「うん……。残念だよ……。今夜にはパリに着かなきゃならないから」

「サトル……」

「？……」



「○×△×□×○……。」
「……………」

暫くは、静かな時が流れていたようだった。
ふと、顔を上げた時にひと言があった。

「サトル…」

「ん？」

「このブローチはねえ。これ迄、いつも私が身に付けていたものなのよ。だけど今日は、これをあなたにあげるわ」

「エ〜ッ。そんなに大切にしていたものを僕にくれるの？ いいのかな〜」

「うん。これを私だと思ってごめんねたら嬉しいよ」

「エ〜ッ。ありがとう。大切にしますよ。君の思い出す…」

「じゃあ、首に掛けてあげるね」
♡ ♡ ♡

お昼過ぎには、いったん自宅に戻り、お母さんの用意したランチを馳走になり、暫くの時間を家で寛いだ。

今夜はパリに着いたらホテルにチェックインしたいので、午後五時位の列車に乗ることになり、ついでに、一週間前の時よりは二時間くらい早めに家を出ることになった。

ブリジット付き添いの見送りで午後一六時頃にはセダンの駅に着いた。一週間前と同じホームの同じベンチに二人で腰を下ろす。

何とも言えない様な、もの悲しく寂しい様な空気が流れていた。

列車を待つ間には、彼女からのお別れの熱い抱擁とフレンチキスには身を任せながら、彼女の温もりと息遣いが静かに伝わっている。

やがて、ひとしほ時程を過ぎた頃に、ホームにはパリ行の特急列車が入って来た。最後の別れのハグとキスを交わした後にデッキから列車内へと入った。

窓側の席に座り、窓を開けると、お互いに込上げてくるものがある様だった。

定刻になると、列車はホームから滑る様に動き出した。

「……………」

「……………」

お互いの名前を呼びあったのが最後の会話となり、別れとなった。



一週間前と同じ光景ではあるのだが、いつもまでも、いつもまでも、見えなくなるまで彼女はホームで手を振っていた。

前日には気持ちの良い天気だったが、やがて、窓外には何日ぶりかで振り出してきた雨が次第に強く、激しくなっていた。

列車は加速を増し、ピシピシと、激しく音を立てながら車窓に打ち付ける雨足の音たちは、先を競い合う様に斜め後方へと走り、流れ行く。
ブリジットの頬に伝う涙の様に思えた。

「アム・ピティ・ナフ」と、二度程つぶやいていた彼女の言葉がいつまでも耳奥に残り、こたましている様だった。

(あの後、この強い雨の中を、彼女は
どうやって帰宅出来ただろう
か……。濡れなかっただろうか……。
そっだ、タクシーで帰ったんだろ
うな……。)

色々心配な気持ちが次から
次へと過っていた。

さならは、ブリジット。

短い時間だったけれども、楽しい
沢山の思い出をありがとう。

窓外では稲妻の閃光が鋭く光
り、走っていた。

オルヴォール ブリジット。

「サトルよ、この夏は、もう、終わ
つたんだよ。」

天上の何処からか、誰かの声で
告げられた様な、無かった様
な……。

否、気の性だったのだろうか。

